山岡荘八

徳川家康

26

立命往生の巻

講談社文庫

定価480円

徳川家康 26 立命往生の巻
山岡荘八

昭和49年12月15日第1刷発行
昭和58年2月15日第28刷発行

発行者　三木 章
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112
電話　東京（03）945 1111（大代表）
振替　東京 8-3930
デザイン　亀倉雄策・菊地信義
製　版　豊国印刷株式会社
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　株式会社若林製本工場

© Wakako Fujino 1974

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

ISBN4-06-131226-X (2)

講談社文庫

徳川家康 26 立命往生の巻

山岡荘八

講談社

目次

朝顔夕顔　七
雷神乱舞　四四
天命と連命　七五
上総の雨　一二四
浅草川　一五〇
鷹野の虎　一八〇
洩る船焼ける家　二一八
根と花実　二二三
越路の雁　二三九
江戸の蛙　二七五
関東大演習　二九五
光りを泳く　三二〇
最後の正月　三三六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

発　病　三五四
生死の筋目　三七四
立命往生　三九九
悲願果てなく　四一八
あとがき　四三七

挿絵　木下一介

徳川家康

26 立命往生の巻

朝顔夕顔

一

片桐且元の耳に、秀頼の遺児の国松丸が捕えられ、六条河原で断罪に処される旨聞こえて来たのは、五月二十三日の朝であった。

知らせてくれたのは、彼の病臥している京の三条衣棚にある松田庄右衛門の宅の女房で、女房は、すでに日々血を吐き続けている且元が、そのまま驚死しはしないかと、おそるおそる告けていったのだ。

世間では且元は大坂からそのまま新知行所の大和の額安寺に移って病をやしなっていると思われている。

ところが大和にはよい医者や薬が無いといって、且元は、すくさま京都へ、担うようにしてやって来ていた。

そして、この三条衣棚の松田庄右衛門の浪宅にこっそりと病臥している。

いうまでもなく京都に屋敷はあるのだが、それはいま、家康の子の遠江中将頼宣に貸してある。したがって彼の評判は洛中でもあまり香しいものではなかった。

「――世間というはわからぬものよ。大坂方の大忠臣よ、大里柱よといわれた片桐とのは、褒美を貰うて生き残り、何の彼のと悪しさまに噂された大野とのは、秀頼さまのお供をしてこ自害なされた」

たた生き残った……と、いうたけてはなくて、彼か家康から、飛ひ地少々宛なから、山城、大和、河内、和泉のうちて一万八千石も加増されたといっことか不人気の的になった。

主家は完全に滅ひたのた。仮にやむなく関東に味方したとしても、自分の屋敷を賴宣に貸してやったり、默って褒美を頂戴したりは、あまりに節操か無さすきる。やはりこれは、武士の鑑にすへき人てはなかった……と、実は彼を仮寓させている松田庄右衛門まてか、内心ては軽蔑しているようであった。

或いは女房もそうした良人の心を知っているので、わさわさ国松丸の処刑を聞かせてみたい興味もあったのかも知れない。

「なに、六条河原て……それは、いつのことてあろうかの」

且元は、薬を煮る手も止めす、おたやかに問い返した。あまりにその様子か冷静なので、女房はホノとしたり、かっかりしたりした

「はい。今日の午後になりましょう　都中はその噂てわき立って居りまする」

「ほう、今日の午後か」

「何しろ場所か六条河原……　六条河原は、　十年前に関白秀次さまの妻妾　十三人か、太閤さまに斬り殺された畜生塚のあるところ。因果はめくる小車しゃと、それはそれは人さわき。旦那さまもお別れに参られまするか」

「お別れ……と、申すと国松君にか」
「はい。たった一人のお子に……憂き世の風は、むこいものてこさりまするなあ」
「そうしゃ。参ってもよい。が、そう人出か多いのては、わしの躰ては無理てあろう　わしは今日、頼うてある薬を、これから取りに行って参らねはならぬ」
女房は、明らかに不満そうな顔になって皮肉を洩らした。
「ては、私は一人てお念仏をあげに参りましょう。いかに敵味方てあったとはいえ、頑是ないお子に何の罪かこさりましょう」
且元は、聞いているような、いないような様子て、前しあかった薬をそろそろと茶碗に注きそっとそれを嗅きわけるようにして、吹きなから飲みたしていた……

二

松田庄右衛門の浪宅は、決して広い構えてはない。といって、間口二間半に奥行き十二間ほとの敷地のうちに、中庭をはさんて小さな離れか建っているので、離れの客か誰てあるかを向隣に知られるほとの狭さてもなかった。
内心の軽蔑は別にして、庄右衛門は、今の京都て且元の名を他人に洩らすようなことはなかった。
洩らしたら、きっと追われている大坂の残党の中から且元を斬りに来る者か現われる。それては、せっかくの親切か無駄になり、将来片桐一族の信頼にたよる手蔓もなくなろうという計算もあるらしかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

残っている文献によれば且元は、大和の額安寺で自刃したとも、病で倒れたとも書き残されているところを見ると、京へ出て来ていることは秘密たったと思われる。

伏見城にある将軍秀忠の許へは、長子の孝利が、父に代わって伺候しているのたから、孝利たけは知っていて、それとなく父の身辺を警護していたのに違いない。

松田庄右衛門の女房に、国松処刑のことを聞かされると、間もなく且元は、藺編笠をまふかにかむって衣棚の家を出た。

また辰の刻（午前八時）前て、出るとすくに、辻駕籠をやとって新京極三条下るの誓願寺の門前にやって来た。

この誓願寺は、京極高次の姉て、豊大閤の側室として、淀の方と才気と寵を競った松の丸殿か天正年間に再興してやった寺てある。

且元は、山門て乗りものをおりると、そのまま寺内に入って、塔頭の護正院の玄関に立っていった。

「頼もう」

歩速も静かてあったか声もまたもの静かてあった。少しても呼吸をみたすと、それかそのまま咽喉も鼻腔も一度にふさぐ、はげしい吐血になりかねない。

声をかけて笠を取ると、取り次きの若い僧は、且元の顔をよく知っていると見えて「おお！」といったまま急いて奥へ入っていった。

そして間もなく護正院の住持か出て来るまて、且元は上かりかまちに腰をおろして、

「やはり、あわてている」

と、小さくいった。
「庄右衛門の家の朝顔に、水をやるのを忘れて来たわ」
奥から住持の智信和尚が出て来て、且元の手を曳いて客間へ請し入れるまで、また且元はしすかに呼吸を整えた。
「だいふ快方に向かわれたようてこざりまするな」
和尚かいうと、且元は、
「お聞きなされたかの」
と、国松丸のことにふれた。
「何をてこざります？」
「到頭……国松さまの処刑か、本日　：なされるそうしゃ」
「では、あの……」
と、和尚は息をのんて、それからあわてて手を叩いて侍僧を呼んた
「さるお方のこと、所司代はお見のかしの方針らしいと、こなた、齢に聞いて来たそ」
「はい。本阿弥光悦とのからてこざりまする」
和尚はあわてて且元に向き直った。
「お間違いてはこざりませぬか市正さま」
且元はそれには応えす、
「前もって頼みあること、お手配にあすかりたい」
と、ゆっくりいった。

三

和尚は又侍僧をかえりみて、
「確かめて見てくれ。そうた。六条河原へ誰そ見にやれ。すくにわかることしゃ」
あわてた口調で命しておいて、旦元に向き直った。
「むろん用意はしてこさりまするか、やはり……到頭……そう、なってこさりまするか」
旦元は、それにもかくへつの感応は示さず、
「ご用意下されたご戒名は何と申されましたかな」
呼吸一つも惜しむもののように低くいった。
「これから高台寺へ参上して、おなつかしいお方にもご供養をお願い申して来ねはならぬ。お手数なから、一寸認めて頂けまいか」
「心得ました。すくに認めて参りましょう」
「あ、それからご位牌はもう」
「むろんのこと」
「柩も、それかしか申せしことく」
「ちゃんと用意致してこさる。外から見れはたたの白木。されと、中は厚く漆をかけ、ご紋も小さく散らさせてこざりまする」
「いろいろと忝けない。それて埋葬の場所は、何れと決めまいたか？」
「されば、松の丸殿のご墓域に葬りおき、他日、世間のおさまりまいた節、改めて阿弥陀ヶ峰の

太閤さまお墓のそばに葬り直すよう……寺中に書き残しておくつもりてこさりまする」
当時、松の丸殿は西の洞院の京極屋敷で病臥中、その松の丸殿の葬らるへき墓域と聞くと、且元は、何度か小さく頷いて、
「ては、ご戒名を頂きましょう」
寸時をおしむもののように催促した。
「心得ました」
和尚はあわてて立ってゆくと、やかて小さな紙片を美濃紙にのせてやって来た。
且元はそれを受け取ると、うやうやしく額にあてて頂いてから、声を出して読んてみた。
「――漏西院雲山智西童子」
「それて宜しゅうこさりましょうか」
且元はそれにも直接答える言葉を節し、
「やかては東山に眠るべきお子に、西の字の重なりか……」
もう一度額につけて、はじめてそっと眼頭へ指をあてた。
「所詮この世に彼岸や浄土はないものらしい……時おりのう、西に落つる陽を、もう一度招き返せたらと夢想するのは、清盛入道だけてはない。わしの朝顔の祈りも効かなんたわ」
「朝顔……と、仰せられまする」
「わしはいま、庄右衛門の庭の片隅に、朝顔の芽を育ててこさる。この朝顔か花をつけますように……花かついたらこ運も又……としかし」
と、いって首を振ると、そのまま戒名を紙に包んて立ちかけた。

「後々のことは、孝利にも為兀にもよう命してこされは、こ供養の儀は頼み入りまするそ」
「もうおたちなされまするか」
和尚かひっくりして手を貸すと、且凡はわすかに笑顔て厚音を射した。
「また、全くお血筋か絶えた……といっのてはない　もっ一人姫かこさる。それてそれかしは、大御所からの……」
いいかけて又笑った。おそらく大御所からの加増もそのため受けたといいたかったのてあろう。玄関へ出ると、且兀は葛湯をいっはい所望した。わか身の疲労を、わか身ていたわるためてあった。

四

高台院の境内ては、法師蟬のせわしない鳴き声に、日くらしの声か混っていた
（正午前から何を鳴きくさるそ……）
且元の感情か、次第にうねりを大きくしていったのは、この日くらしの声を耳にしてからたった。
日くらしは、且元に、豊太閤のあの哀しい辞世を想い出させ、更に自分かいま訪れよっとしている人の不思議な運命を想い返させすにおかなかった・・
露と落ち露と消えぬるわか身かな
浪花のことは夢の又夢
この太閤の辞世を聞かされた時、且兀は、且兀なりに人生かわかったような気かしたものた。

ところか、そんなわかり方で済む人の世であったろうか　う　夢の又夢は、浪花のことところか、この天地を永遠につつんで放さぬ無限大の呪詛に思える……

且元自身の人生も悪夢ならば、石田三成の人生も、大野治長の人生も、どこにも一点の光りも止めぬ灰色の人生はかりてはなかったか

いや、男たちの人生たけてはない。

症の方はいわすもかな、高台院にせよ、松の丸殿にせよ、一条殿にせよ、昔日のあの伏見の栄華をわが身の今の幸不幸にとう繋き得ているというのてあろう．？

記憶の底には、また淡く、あの頃の愛憎か爪跡を残しているかも知れない　か、それ等のすへては全く無意味な一場の夢に過きず、一つの露も、一つの救いも止め得なかったのてはなかろうか……？

且元は、ここても自分の心気の昂ふりを警戒した　警戒しなから豊公廟につらなる高台院の庵の前に立つと、案内を乞う声すらすくには出なかった。

ここにある高台祠といわれる廟だけは、たしかに善美をきわめている　三間半四間の小堂なから、内にはことことく描金の蒔絵がほとこされ、欄間には土佐光信の三十六歌仙かかけられている。いや高台祠だけてはない　秀忠の命によって、小堀遠州の手になる庭園は、菊間の水を引き、樹木一本、石一つのたたすまいの末にまて、細心の美を積む苦心か偲けられている。

（しかし、それか何てあろうか？）

それ等はことことく太閤のわか妻お寧々に賜った愛情の形見というのてはなかった

何れも、宿敵ともいうへき大御所の力を示す敬愛のあかしてはなかったか？

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton